



Title	河合榮治郎「獨逸社會民主黨史論」
Author(s)	矢田, 俊隆
Citation	北海道大學 法學會論集, 1, 159-163
Issue Date	1951-09-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/17037
Type	bulletin (article)
File Information	1_p159-163.pdf



[Instructions for use](#)

河合榮治郎「独逸社会民主党史論」

矢田 俊 隆

二つの世界のきびしい対立を前にして、第三の道乃至二つの世界を媒介する道が果してありうるか否かは、現在の危機に生きるわれわれすべての切実な関心事である。この時に當つて、社会民主主義に再び鋭い注視が向けられて来たのは、当然のことといつてよい。中でも目下着実な歩みが続けつゝあるイギリス労働党に關しては、最近特に學問的研究が進められ、数々のすぐれた業績が生まれている。これに比べるならば、曾てのドイツ社会民主党に關する研究は、大体においてなお依然停滞を続けているように思われる。これは、後者がすでに二十年近く前に、しかも無氣力と重なる失敗のうちにその姿を消したことが大きな理由の一つであらう。時代のテンポは、現在生動していかないものへの関心を遠くに推しやるほどに急であり、特にナチスから戦後にかけてのドイツ自体が、この問題の精實な研究を進めようには、あまりにあわただしすぎたのである。けれどもわれわれにとつてドイツの社会民主党は、それがイギリスのような先進資本主義國にではなく、日本と同じような社会的後進國に生れたものであること、故に、しかもそれが失敗を重ねて没落したことのために却つて重要な意

味を持つのであり、その性格の究明は決してなおざりにされてはならないのである。しかし暫く前までのわが國におけるドイツ社会民主党史研究は、このようなわれわれの要求によく応えるにはあまりに貧しかつた。特にこの党の發展全体を一貫して考察したすぐれた書物は、これまで始んどなかつたといつてよく、研究に志すものに多大の不便と困難を与えていたのである。この時に當つて故河合榮治郎教授の「独逸社会民主党史論」が公刊されたことは、まことに大きな喜びである。以下簡単にその内容を紹介しつゝ、若干の所感を述べてみたい。

本書は二つの部分から成つてゐる。その第一部は、河合教授が一九三六年から三七年にかけて東大で行われた特別講義を、石上良平氏が當時のノートやプリントをもとにして整理編集されたものであり、その内容を示すために次に目次を掲げてみよう。第一章緒言、第二章独逸の資本主義と社会構成、第三章十九世紀前期に於ける独逸自由主義、第四章マルクス、エンゲルスと「共產主義者同盟」、第五章ラッサールと「全独逸労働者同盟」の成立、第六章「社会民主党労働党」の成立、第七章ゴータ合同、第八章社会党領任法とエルフルト綱領、第九章修正主義論争、第十章世界大戦、第十一章独逸革命、第十二章革命より現在に至る状態、第十三章結論。これによつて分るように、要するに本書の第一部は、ドイツにおける資本主義と共にドイツ自由主義がいかにして生れ、いかなる歪曲と重圧の下に成長して来たか、一方においてマルクス、エンゲルスの「共產主義者同盟」、他方においてはラッサールの「全ドイツ労働者同盟」からドイツ社会民主党がいかにして生

れ、それが没落に至るまでいかなる苦難の道を辿つて来たかを要領よく述べたものである。本書の第二部には、別に書かれた同教授のドイツ社会民主党に関する二つの論文「独逸社会民主党の成立」、「独逸社会民主党とマルキシズムの修正」が収められている。前者はゴータ合同に至る経緯を敘述したものであり、後者はドイツ社会民主党が半世紀の歴史を通じていかに原始マルキシズムを批判し修正して来たかをテーマにし、特に二十世紀初頭の修正主義論争についてカウツキー、ペルシニョタイン、ローザルクセンブルクの書物からそれぞれを引用しながら述べたものであつて、共に第一部に述べたところを部分的に詳細に取扱つた論文で、前者を補う役割を果しているが、しかし著者の基本的見解については前者と何等異なることはない。それ故本書の真面目は第一部につきるといつてよく、以下第一部を中心にして論を進めることにする。(なお同教授のドイツ社会民主党に関する他の二つの論文「コミンテルンの崩壊」、「ヒットラーの国民社会主義運動」は、別冊「コミンテルンの運命」に収録されている由である。)

本書は、ドイツ社会民主党の全体に関するまとまつた敘述としては、恐らくわが国における唯一のものであり、またその概観も手際よくなされており、その価値は極めて高く評価すべきものである。卷末に附された詳しい「独逸社会民主党に関する参考文献」並びに「独逸社会民主党綱領の変遷」と相俟つて、本書が入門書として大きな役割を果すであろうことは疑を容れない。河合教授の思想的立場は、周知のように理想主義哲学を背景に議会主義を通じて社会主義の実現を図

ろうとするきわめてはつきりしたものであるが、本書に見られる数々の批判も、この立場から一貫して頗る明快になされている。しかも河合教授独特の文体の美しいリズムは、読者をいつしか魅了する力を持つてゐる。のみならず本書は、元来イギリスの社会思想史を中心に研究された教授のドイツに関する深い造詣を示すものとしても、甚だ注目すべきものである。

たゞしかし、このように多くのすぐれた特徴を持つ本書も、もとより完璧なものではなく、そこには若干の欠陥乃至問題になる点があるように思われる。今それを、一般に政党史研究の正しい態度と関連させて、立入つて考えてみたい。(政党は近代民主国家においてはその政治的構造の重要な中核的要素をなすものであるが、同時に極めて把握しがたい動的な政治現象であるので、その研究に当つては一定の方法とそれに従う事実の探究、問題の整理等種々のプログラム設定が必要である。元来政党の研究が政治学においてどのような地位を占むべきかは頗る重要な問題であるが、こゝでは勿論このような広汎な問題には触れない。それについては日本政治学会年報一九五〇年度「政治学」中の磯山政道氏「政党研究の諸問題」、また同氏の「政党の研究」参照。こゝではたゞ一つの団体乃至組織としての具体的な政党の特徴を捉え、その発展の跡を政治史的に研究しようとする場合に、どのような方針と態度を以て臨んだらよいかについて、若干の見解を述べようとするにすぎない。またその際にも、ある政党がどのような時期に発生したか、またどのような性格の政党であるかによつて多少の相違があるのは当然であるが、こゝではこれにもふれない。)

政党史の研究に當つて先ず第一になすべき事柄は、その政党自体の活動の跡を史料に即して事実的にできるだけ明確詳細に辿ることであり、従つて政党史の敘述はこの仕事の結果をはつきり報告するものでなければならぬ。本書ももとよりドイツ社会民主党の發展の跡を敘べているのであるが、しかし概して同党の勢力の消長が簡単に触れられているに止まり、つきこみ方の不足にもどかしさを感じる箇所が往々ある。それには勿論講義としてなされた通史であるという判断を考へあむ必要がある。しかし概観的なスケッチ故にまんべんなく詳しく述べる事が不可能であるにしても、重点の置き方や全体のバランスについてはなお批判の余地があるように思われる。例えば第一次大戦直後の革命の際におけるS・P・Dの態度についての敘述は、あまりに簡単にすぎ、またワイマール時代における封建的勢力の重要性が説かれながら、その具体的な役割についてはほとんど触れられていない。全体として今少し多くの頁数が割かれ、重大な時期が一層詳しく取扱われたならば、更に立派なものになつたのであらうと惜しまれるのである。

政党史研究の第二に重要な仕事は、ある政党の掲げる綱領及びそれを裏づけるイデオロギーについての、また同党の指導者の思想についての社会思想的な研究であるが、本書においてもこの点の究明には力が注がれ、ドイツ社会民主党の政綱の意義は明かにされ、代表者の人物の思想の紹介が行われると共に、これに対する同教授の独自の批判が加えられ、またそれらの思想の背景乃至思想的系譜にも遡及されている。しかしその際最も重大な問題は、そこでの教授の研究態度

そのものである。すなわち教授が党首脳部の活動や思想についてはしばしば加えられる批判は、専ら価値判断的批判に止まつて、背後の具体的な個々の歴史事情に深く結びつけて、そこから批判する態度とはいがたいものがある。いゝかえれば、その批判に當つては教授の理論的立場が先走つて、現実からの批判に欠けるところがあるのである。教授のドイツ社会民主党史研究は常に強い実践的関心に貫かれ、そのために大きな魅力を持つのであるが、しかしこのあまりに強すぎる教授の実践的な関心が、あまりにも確固たる教授自身の思想的立場が、却つて現実への掘下げを困難にしているように見え、歴史研究の成果から謙虚な教訓を得るといふよりはむしろ、歴史研究はたゞ理論的構成の素材としての役割を果すに止まつているようである。教授のマルクス主義観にも問題になる点はかなりあるように思われるが、これは教授の全思想体系に深い関係を持つので、こゝでは立入らないことにする。なお本書は大体において経過の敘述、思想の紹介、それへの批判に終始し、そのような経過や思想が何故に生じたかという理由の追究が不十分であるが、これらはいずれも結局において背後の歴史的基盤の分析が不徹底であることによると思われる。これについては今少し立入つて考察する必要がある。

ある政党の性格の推移發展を明かにし、且つその政党の實際に果たした役割を明かにするためには、常に現実の歴史そのものとの関連を重視しなければならぬことはいふまでもない。その意味で政党歴史は一般政治史全体の中にはじめてその位置を与えられるものであり、政党史の研究はその当時の一般史学の學問的水準乃至研究成果に依存せざ

るをえない。河合教授もこの点の配慮は決して怠ることなく、常に現実の歴史に目を向けておられるが、本書は十数年前の講義を整理したものであるために時間的にかなり古く、そのためその拠り所としておられる歴史的知識には、その後の学問的進歩によつて修正されたものが間々存しているのみならず教授の歴史的現実の把握の仕方、類型概念的であり、具体的な鋭い追究において欠けるところがある。本書でしばしば使われ、説明のより所にされる封建的勢力、ブルジョアジー、プロレタリアート等の言葉も、たゞその強弱が云々されるだけであつてその実体的勢力の分析がなされていないので、殊に重要な背後の社会構成に關して明確な観念を与えられることができない。これが不明瞭であるためにそこで行われる批評もまた不十分であり、強い現実的説得力を持つことができぬのではなからうか。要するに教授はその本質においてあくまでも理論家であつて歴史家ではなかつたように思われるのである。

次に政党史の研究に當つては、把握を一層具体的にするために、政党の機構や運営について立入つた分析を行い、またこの党の指導者乃至幹部の行動や精神構造を社会心理学的に追究し、更に幹部と一般黨員また党支持者との結びつき方についても考察を進めねばならない。がこれらの点については本書では何等新しい見解は示されていず、またドイツ社会民主党の社会的基盤の分析もすでに述べたように概念的に止まつている。更にある政党と他の諸政党との關係についても研究を進める必要があるが、本書においてはドイツ社会民主党と他の市民的諸政党——国民自由党その他——との關係乃至比較は明かにされて

いず、これが一つの欠陥をなしている。そして最後に政党史の研究は単に一国内部に止まらず、世界的観点からの國際的な比較検討にまで及ばねばならない。例えばドイツ社会民主党の研究は、他の諸国の社会主義政党すなわちイギリス労働党及びロシア共産党との比較に進む必要があり、しかもたゞそれらの理論性格の共通点と相違点をそれぞれ比較するだけに止まらず、おのおのの歴史的地盤に具体的に定着させて比較検討しなければならぬであらう。河合教授は恐らくこれを意図されていたに違いないが、本書では特にはつきり問題にされてはいない。以上のような様々な方面からの動的総合的な研究によつてはじめて、政党の歴史はその全貌を明かにし、その特徴は明確に把握されると思われるのである。

最後に細かなことであるが、本書には往々ミスプリントがあり、また間違ひとおぼしき点もあるので、機会があつたら改めてほしい。例えば三頁の、ロシアが反動ヨーロッパの支柱であつたから、これに近い東エルベロシアもドイツにおける反動の中心であつたという敘述は人を誤解させる惧れがある。また一五二頁の新カント主義のマルブルク派がカントの社会哲学、道徳哲学に重きを置いたというのはおかしい。一九七頁の、ルーデンドルフが参謀総長というのも誤りであり、また一九八頁ではルーデンドルフが講和のために上からの自由主義革命を行ふべきことを主張したといわれているが、これは検討を要する言葉である。

以上氣のつく点をいろいろと述べ立てたが、しかしそれらはいずれも望蜀であり、本書の持つ多くのすぐれた価値を損うものではない。

本書はたしかに翻期的な寄与というべきものであり、われわれはこのような要領のよい概観を得たことを喜び、これをもとにして、今後更に研究を進め、深めるために努力すればよいのである。事実わが国においても最近ドイツ社会民主党について部分的には既に多くのすぐれた専門的成果が生れつゝある——例えば岡義武、服部英太郎、大河内一男、猪木正道、林健太郎、松田智雄、村瀬興雄等の諸氏のもの——。われわれは、この方向を徹底させ拡張させることによつて、人々の期待に正しく応えることができるであらう。

なお最後に今一つ附言すべきは、政党のような研究テーマを取り上げる場合には、一方においてやゝもすれば陥りやすい党派の乃至公式的な態度を異々も警戒し、あくまでも客観的研究を進めると共に、しかも他面単なる事実の羅列や彼の地の研究の単なる紹介に止まることなく、どこまでも批判的な吸収消化に努め、自主的な見解を確立することが大切だということである。この二つのものの統一は、実際問題としてはまことにむずかしい事柄であるが、しかしこれによつてはじめてしばしば問題にされる社会民主主義の現代的意義についても、正しい見透しが与えられるであらう。

(一九五二・一・二二)